# 合田強の『紅毛醫述　巻一』の解題と翻刻

板野　俊文、田中　健二
香川大学

## はじめに

本稿では、江戸中期の讃岐の医家であった合田強[1]（一七二三～一七七三）の著した『紅毛醫述　巻一』について述べる。これは強が宝暦十二年（一七六二）正月より同閏四月末まで長崎を訪れ、阿蘭陀大通詞である耕牛吉雄永章[2]（一七二四～一八〇〇）と、その弟の蘆風吉雄永純の成秀館で学んだ講義録であり、五巻からなるもののなかの第一巻である。この講義録をまとめて一巻として残された本が『紅毛医言』である[3]。この中の『紅毛医言』[4]と『西洋医述　巻三』[5]『西洋医述　巻四』[6]『西洋医述　巻五』[7]に関しては、既に我々が報告した。重複を避けるため必要な説明以外はしない。先行論文を参考にされたい。

巻一の特徴は、表紙に「阿蘭陀内治術」と題を書いた後、二重線で見え消しにし、「紅毛醫述」と書き加えた所である。当時、阿蘭陀流外科は広く知られていたが、阿蘭陀流内科は、知られておらず、内科や他の科がないというのもおかしいと思われていた。これは、後に建部清庵が杉田玄白に手紙を託して尋ねた「阿蘭陀ニハ内科ノ醫者ハナキコトナリヤ」という疑問[8]にも関連するものである。その疑問が講義を聞くことで一挙に解消された思いが率直に述べられている。これは、本文に入る前に「紅毛醫述序」に書かれている。なお序を書いたことから、後に出版しようと考えていたかもしれないが、諸般の事情[9]で出版はされなかった。

また、この巻では、熱病から始まって、各種の感染症疾患の病状と治療法を述べている。治療法の一環として「汗吐下」について書かれている[10]。

本論文の目的は、すでに指摘した先行論文の重複になるが、吉雄耕牛の医学的な知識がどれほどであったかを知ることであり、またそれを書き残した合田強の業績を顕彰することである。

日本医史学雑誌　第六十三巻第四号（二〇一七）

## 凡例

一　この書は吉雄耕牛の講義録の五巻中の一巻（『紅毛醫述一』）である。

一　今回、翻刻したのは香川大学附属図書館医学部分館に所蔵されているものであり、これは、原本のコピーが製本されたものである。

一　本文は漢字とカタカナで書かれているのでそのままの形で翻刻した。また見え消しは原文に従った。

一　本文中日本語の横に書かれているオランダ語の発音は本文のポイントより小さいポイントを用い、日本語の横に書いた。また説明の部分も同様にした。

一　著者の注は［　］を用いて書いている。（　）は筆者の説明である。

一　図は原文を元にして写図を作成した。

一　解読不明な部分は■を用いて示した。

## 翻刻

（表紙）

宝暦十二壬午春二月十五日　　忠海白木屋彦左衛門

一拝天地　二　　三無楽吾意殺生

△莨宕(11)　喰葉其人乱心二三日後自然癒

△乾河豚　煮食用　瘧則吐　吐后癒

通解

紅毛醫述　一巻

上巻

阿蘭陀内治書

（表紙裏）

Gr, ケレイン

ヨ　シコロフル

る　タラリス　一匁

る　ヲンス　八匁

ホ　ポント　九十六匁

ホβ　ハルフホント　四十■■（八匁）

紅毛國

土伏(茯)苓

（土茯苓(12)）

二月廿日

○丹方

○テイレギ　瘵カ

紅毛醫述序(13)

善モ不レハ積　則不レ足レ成レ名ヲ　一善之微ノ　積テ而不レハ息則竟ニ至レ成レ德ヲ而後用ニ之於世一　則其德之所レ及　廣遠而不レ可レ有レ限也　德之流衍スル速ニ於單郵ヨリモ而傳一レ命ヲ　崎陽高及吉雄先生　家世為ニ紅毛譯師一　旁ラ好ニ外科之術ヲ一　常直就ニ蕃蠻醫一學ニ其術ヲ一　習レ之也精　誠レ之也數年　廣ク施ニ諸ク衆ニ一　其德流ニ行スルコト東方ニ一　曰ニ多シ一日ヨリモ　今茲壬午之春　余来ニ崎陽ニ一　寓ニ舍ス吉雄先生ニ一問ニ以ニ紅毛内科之術ヲ先生及ヒ其ノ賢弟　蘆風君譯ヲ以テ教レ之ヲ　其書蓋シ數萬言　自ニ百病證治一至ニ草木藏府之説ノ一　莫ルコト不ニ全ク備ラ一　而シテ術悉ク歸ニ于汗吐下ニ一(14)矣　嘗テ聞ク紅毛ノ為タルヤ医惟有ニ外科ノミ一　莫シトレ有ルコトニ内科一　余竊ニコト疑レ之ヲ數年　今一旦ニシテ而氷釋ス　於レ是ニ随テ聞キ随テ筆ス遂ニ積テ為レ巻ヲ　嗚呼不レ圖ラ為スコト術ヲ　至ニ於斯ニ一　夫レ而シテ後ニ先生之德流ニ行スルコト於東方ニ一者　亦将ニ益々遠大ナラント一　豈有限量乎　於レ是楽為ニ之言一爾不ニ愉快ナラ一乎ヤ　豈不ニ愉快一乎

寶暦十二年閏四月(15)　讃州　合田強書於崎陽寓舍中

○凡熱病ハ老人虚弱人ハ可畏也　此熱不解者多為労可頼治

○コヲルツ

二月廿日

○始有腰痛　脉急頭痛　殺道如逼　或嘔吐甚渇　大熱暫白熱　渇亦止　寒熱　往来戦慄　為渇有間日　或二日　或三日　或無間日　終日熱甚者　是體中水与血動故　為寒熱○若無間大熱者　是一症也　骨節疼痛　食不進　脉急其後熱不解　発渇発譫語　或撮寫目中生花煩燥　不眠或戸外欲出　或舌燥汗如玉○俄発熱煩燥如狂　煩渇摘溺為悪証○獨摘搦為○三日間日之瘧後湿深者為肺之労或為腫脹○老人病不甚　壮年者病重

○コヲルツ

△問熱如何　是ヲ熱ト云ハ気血不順シテ動ク或ハ寒暖ノ気ヲウケテ此病ヲナス　渇モアル　熱ニ外ニハナキカ初ヨリ熱アルト　始寒フナルト二ツナリ裏熱ト　日々熱アルコト　間日ノ寒熱　三日間日瘧

ヘイゼリレスレンタ　ヘエリス　同コウテリヤナ　ヘエヒリスクハルタアナ　ヘエヒリステルテヤアナ

悪症之熱　○ゴソ〳〵悪寒アリテ腰痛戦慄シ○ドレガ熱カト云　サメタリ　又続テ熱ガアルトアリ　脉強ナリ　頭痛甚　胃ヨリ上カ胸中カ悶スル　吐カアル悪■ス　後ハ大熱トナル　煩渇引飲譫語　大熱ハ一時ハカリノ間ナリ　又無往来大熱骨節痛不食　水不甚好脉数　後ハ大熱飲引又一症ハ頭痛甚譫語不眠脉強数　汗出如玉　舌乾燥　○熱ノワケ如何一日間ノガ二日ニナリ又三日ニモナル　大熱狂走不安如狂煩渇飲引未懃是難治也　○三日間日ハ后ハテイレキ又ハ腫　気ニナル也　○凡熱病ハ老人虚弱ノ人ハ可畏也　不解者ノ多ク為労也

ヘエリスマリデナア　ヲカン　労瘵

新言以■十

瘧熱病薬方　一ケレイン　癲癇ニ用又頭瘡膿アルニ　梅毒

サルカルデベネデキシ　一分六厘

主治　熱甚不去者　此発散之薬也

主治　治寒熱往来如瘧

角　焼
コルネセルヒイユステイ

一方　角石　鹿　サフラン　七厘　金銀銅鐵出ル処ヨリ出ル石ナリ（メタアルノ）

銀山ノツル金ナラン赤キ星ノ入タルヲ良トス

鹿角霜　三分

右三味以白湯服

主治同上　山ヨリ出石類水銀ノカタマリノ如キモノ也

又方　ヨクリカンキリ　三分　アンテモウニデヤホレデコム

散薬　サルポロネル　各一分六厘　サフラン　七厘

焔硝ト硫黄ト合シテ焼タル物　二気丹（二似タリ）　去是ナリ

右四味為散薬服ス

又方　主治同上

散薬　アンテモウニデヤホレデコム

サルカルドベネデキシ（サルト云ハ塩ト云事也）　サフラン（アザミヲ焼テトリタル塩ヲ云也　又葉モ使フ事アリ）　各一分六厘

ロプサンブウシ　二分　発散ノ薬也

タヅノ実ノ膏

木

能テリアヽカニ同シ　大発表之物也

主治同上

又方

散薬　タルタリ十

テリアヽカ六分五厘　アンテモウニデヤホレデコム（出前）

○サルカルドスベネデキシ（見前）　各一分六厘　サフラン　八厘

発汗

発汗方

又方　デヤスコルドフラカスト　ソリイ（七分）　合セ薬也

主治同上　アザミノ水ナリ　アクハト云ハ水ノ事也　アサミヲランヒキニテ取タル水ナリ　汗ヲ発スルモノ也

○アクワカルドベネデキシ　廿四分

○スコルデ　八匁　肉桂

○カシヤリキネ

○デキタム

○高陸根

○トルメンテルラ

○ガルバアノン

○ゲンチアヽナ

○ゴムアラビアコム

○スナヲラキスヤラミン

右各四匁阿片五歩

サルプルネラ　三分三厘（二気丹）

サルカルドヘネデキシ（見前）一分六厘

サフラン七厘

右用被覆而取汗

発汗之後病解　又有熱而■渇者用何薬乎　用後方

一方　フタツラ麦ノ粉ヲ湯ニテネル則麦粥也　作君曰治渇不大便者

アヽクワホルデク　二百四目

水ノ事　大麦也

シクスリモウム　橙油等之酢也　止渇

十六匁　佛手柑

サガリイ　見合　白砂糖

右　三味　温服

又方　治渇

ホルデメンダアチ　ホルデハ大麦也　未詳
ラシルハカンナクズ也
ラジルラコルネセルヒイ　鹿角ヲケヅリ用ユル也
カンナニカケタ
各十六匁
金砂石也其色碧ニシテ金泊之筋アリ雲ノ如シ重極
堅也
全国銅山ヨリ出ル冷ナリ遠イ物也　當ニハ■■■
甘草也　ケヅル事
リクリチラサコンテシ　四匁
打ヒシク事　甘草ヲ打ヒシイデ入ル事也
右三味以天水煮　取三百廿目
■■■粕ノシボリ汁也
アアクワペルヒヤ　三百二十目
天水也　天水也則雨水也
スピイルテスサアリス　アヽタカラナムサポウナム
スヒルテスハ焼酒也　塩ノ事　サルアルセウニヤヲ右ノ内ヘ少シ指入ルナリ
右三
　　元気強
後吐方　若有勢　欲吐者用此吐方　可吐胃中之穢　此病有上■者也
ヲナピスエテキネノ事
　　細末也
―■■■■ウル石　　畠及田代赭石之類
タルタルーエメラシ　ケレイン五　酒樽ノコリノカタマリ也
右以フドウ酒用之
　ブドウノ汁ヲ桶ニ入テネサシテムシテワカス　ワキテ後酒トナル

十六匁
前又方　吐薬也
白イト云事
ヒツテリヨヲルアルビイ
白丹礬　五分
アヽクワハ水ノ事
アクワカリダ　未詳　三十二匁
右カリダノ水ヲ以テ礬ヲトキ用ユ
又方　吐薬也
白キト云
ヒテリイアンテモウニ　ケレイン四
右一味細末白ブドウ酒ニ一夜ツケコレヲ用　シハラク待テ若不吐者ハ白
湯一碗ヲノム即吐ス　○若用吐方病不癒者用何哉　答曰　血多者　自尺
沢取血　其後以下丸左薬下之
丸薬　下剤也
リウビイ　和無
レイシイナ　順曰薫陸　永純曰上品松脂也
ヲヽリヨムメンタ　霍香油
右為丸
又丸方　下剤
エキスタラクト。カトリシイ　薬方ノ名也
シカモウニイ
花牽牛花ニ似タリ　味辛和胃中湿乾者軽不可軽用
ヲヽリアネイシ
右丸　アネイシハ茴香

又方

ホウリヤセイナア　二銭

ラアテキス（根ト云事也）　ラバルベル　大黄也（日本）　一銭

セイメンアネイシ　小茴香也　五分

右為湯砂糖ヲ加ヘ煎シ温服ス

又方　煎湯

ホウリヤセイナア　二匁

ラアテキスヤラパア（根ト云事）　一銭（根マデラト云島ノ産也　上品色黒黄切之粘光　主治下腸垢下水下腸中穢物　一味為散七八分用）

タマリンデ　五分

木ノ実也　酸者也　マタガスカルセイロント云国之産也　性冷開一身之鬱用之■■解大熱

シナモシイ　肉桂也

右煎湯

二月廿二日

△△腫脹（一名　ワアテルシユリテキ　ヘイドロピイクス　水道カ破レテ腫ルモノ也）　水ハ経肉ノ間ニ順スルモノカ塞ル故ニ腫トナル　足ヨリ腫ルアリ　頭ヨリ腫ルアリ　一身鼓ノ如ク腫アリ○寒暑ノウツリニ腫モノ也　腹脹ハ腹ニ針ヲシテ水気ヲ抜ク事アリ　上手ノ外治ナラテハナシカタシ○大便結スルモノ也　○腫ヲ按テ陥ルモノハ渇ハナシ○脹ツヨキハ渇スルモノ也○甚タ呼吸短息ナル悪寒アル也○鼓脹ハ腹中ニ風ノアルコトクグルグルスル也　膀胱ニ風ヲ吹入レタルカ如シ　指テ腹ヲタヽケハ太鼓ノ如ク鳴モノ也　是難治ノ症也　老人ハ必死ナリ　若キハ六七ハ治スヘシ　臓府肝脾ノ病ナリ○渇ノアルハ治シヤスキ也○小便赤ク細キモノ也ク通スカヤウニ成テハ治シ難シ○痰咳ヲ兼ルモ難治也○身中ノ水気ヲ本ノ所ヘ引ヨセテ去ル治術ヨキ也　湯水ヲ飲スハアシヽ　治術ハ発汗第一也　利水ヨリハ汗ヲトルガ甚効アルモノ也　治術ハ汗吐下ノ術ニアラサレハ不治也　第一汗　第二吐　第三下腸胃ヲ清クスルコトヨシ　是下スコト也○何故ニ吐法ヲスルヤ　即前ノ熱病中ノ吐薬ヲ用ル也　下ノ法ハイカン（下方也）

下方

ラアテキスヤラパア

シンジイブル

生姜

キリモリタルタリイ　酒樽ノ内ニ付タルヲリヲ云

躰中ノ酸味ヲクダク　小便ヲ本ノ如クニス　鬱ヲ開キ悪疫ヲヤム者ニ用テ本ノ如クニスル也

右為散

又方（下方也）

キリモリタルタリイ（酒樽ノオリ）

ギウタガンバ　シヨウ也　絵ノ具ニツカウ也

ヲヽリメンタア　霍香ノ油

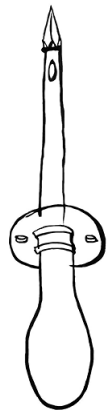
右散トス

又方　ラアテキスヤラパア　五分

ギウタカンパア　シヲウ也
マアシス　肉豆冠ノ花也
ラツプサンブウシイ　一銭
タツノ実ノ膏

又方丸薬
レイシイナヤラツパア　是ハ菫陸トカラハアトネリ合シテ作リタモノ也
菫陸也
ギウタカンバア　雌黄
ヲヽリマアシス　肉豆冠ノ油也
ホウリハ葉ノ事　即肉豆冠ノ葉也

又方丸薬
レイシナアヤラパア
メリクウリユスドルシス　軽粉也
琥珀ノ油見合少入ル
其外此類ノ薬ヲ用ル也　○ヲクリカンキリ　○アンテモウニイ
○サルプルネルラア　○芒硝ノ類　○カルデヘニキシイ　○エネイフルノ
二気丹　ムロノ木ノ様ナモノ　ソナレマツ
油　○琥ノ油　木通　土茯令ノ類ヲ凡腫ニ用ユルナリ
○吐薬ヲ用テ後用ル者ハ一方　○ヲクリカンキリ　アンテモウニイデヤ
ホルデコム　サルカルデヘネデキ　ヲヽリヨユエネイフル
サルハ塩ト云事
右散トナス



右ノ管ヲ小腹ノワキ腹ニサシコミ鍼ヲズットサシコミ引テ水ヲトルナリ口傳

○吐薬　○杜衡根　○ツブロ　○青タバコ
スミレ也
イペカクアナノ根　去心　皮ヲ細末　白丹礬カ又ハ焔硝カヲ加
随一ノ方ナリ　二分ヨリ一匁迄用強弱ニヨル
焔ノ方ヨシ

二月廿三日
又ヌル湯ニボウトルヲカキ交セ飲ス　又塩湯モヨシ
◎凡吐方ヲ用テハヒタト白湯ヲ随分飲スベシ　不飲時ハ死ニ至ル事アリ
ノミカゲン
○凡病上部ニカキラズ下薬ヲ用テ二三日四五日ヲヘテ吐薬ヲ用ユヘシ
病ハ皆胃中ヨリ起ルモノ也　吐スレハ胃中ノ穢物皆盡テ下熱ノ病モ癒ル也
○凡薬ハ草木共ニ製法ナシニ只乾シテ用ル也
石類ハ製スル事アリ
○上古ヨリ今ニ至ルマテ只汗吐下ノ術ニテ病ヲ治スルノ外更ニ術ナシ
△水腫ノ次也
△△又方　アンテモウニイテヤホルテコン　サルポルネル
サフラン　琥珀ノ油
右散トシテ朝空心用

又夜用ル　サンブウシニ交テ用ル也
ルブサンブシ　デヤスコルデフラカスト
ヲクリカンキリ　アンテモウニイデヤホレデ
カルデヘニデキ　肉ヅク　肉桂
ゼネイフルノ油　琥珀
主薬也
右　サンブシニ交テ用ル也
又酒ニテ用ル方
ヤアデキネ　サルサパレラ根　リキノムクハヤシ
大麦也
コルトエユスデム　コントシイ一
右三味一日鍋ニ入煎ズ

□

□石淋（カラヘエル）　不考問曰　石淋曰何乎　腎先痛ム　白水道痛（小便道）　其因粘者
塞阻茎中ヲ碍小便ヲ　是腎痛故也　如痰如布沙者為
茎痛　痛軽重　腎有瘡生熱故下碍小便　死後解之知之　皆如此　問曰
症如何　師曰小便道痛沙石亦通ニモナル
為小便血小便渋　欲起腰痛脇下拘攣　自両股引脇　依苦発汗　或為吐
不能臥股不仁痺　睾丸偏急拘少者治　老者難治　凡此病腎痛殊甚　発
熱小便難通冷汗者必死也　大吐者凶　初小便清通急速通　次渋　次石
通　小便濁　石下是可治　下丸石丸石易通　下角方沙者凶　始保護第
一可除去　止痛可下行渇吐　有十四方　○治術
慎可用薬

（頭注）
［膀胱ノヘイスルト云筋カ弱クナリテ膀胱ノ力モ弱ナリ不通アリ　又
ハインキヤウノ内ニネハルモノ（陰茎）　又ハ塩ノ如キモノタマリ不通モアリ
其ユヘ水ヲ不利　其時ハ必死ニナル　依之カテーテルト云フモノヲ拵ヘ
水道ヲホカス　其仕掛ハ　病人ノ気分ヲ能窺　左ノ手デインキヤウヲ少
シ上ケ　カテーテルヲ右ノ手ニモチ　カテーテルニ油ヲ少ヌル　少シ
ツヽサクリ入ル　病人ハ腰ニ枕ヲスケ　アヲナカセ又腰ヲ高ル故ニ枕ヲ
サス也　カテーテルノ針計ヌキ管ハ入置也　カテーテルノ図五■ニ記
ス］

二月廿四日

□△疝気ハ（コレイキ）　胃腸コハリ痛　噫気出秘結シテ痛　色々ニアリ　小腸ト大
腸トノ痛ニ由テ違也　第二ニ大痛　其起リハ右ノ結シテア
ル大便カアルニ由テ　間ニ気カタマツテ噫気トナリ屁トナル　気カ滞
リネバリモアル大小腸ノ分リハ大腸ニアル時ハ腹ハリグウグウ鳴リ
是腸ニ気ヲ滞ウケタル也　故ニ痛甚シ　多ハ左脇ニアリ　臍上痛甚也
小腸ニアル時ハ臍下ニテシブリテ按ス如ク痛也　噫気ヲノ出ルハ小腸
ノ病也　胃中心アシク欲吐ント　或吐ス　此時ハ大便下利甚シ　熱ア
リ大ニ渇不眠○大腸ノ病ハ便結也　小腸ノ病ハ下利ス　小腸ハ水穀未
分故○下薬ヲ以テ下シテモシ久ク不通　五七十者ハ不治也　老人ハ久
シクシテ難治也　若キハ早ク治ス○後ハ引ツル事アリ　大熱汗モ出ル
是ヨリ卒中ノ如クニナル也
治術　腸ノ滞気ヲ開キ痛ヲトメ下薬ニテ下ス○大腸ノ治ハ肛門ヨリ薬ヲ

ツキ入ル也

方　ヘルバビスマルハ　大茴香　二匁

ヘルバルウダハ　大和本草ニヘンルウダト出

小茴香也

セエメンコシニイ二匁

野菊花半握　右五味水百卅目ヲ以センシテ

右　水六十四匁ヲトリ　白蜜十六匁　胡麻油　見合入ル

右　カキ交テ加減シテ水ツキニテ肛門ニツキ込テ後下也

丸薬

エキスタラクトカトリシイ　レシナヤラハア

ラウダアニイヲヒヤアト　ヲゝリアネイシイ

茴香油

又方　レシイナアヤラパア　キリモヲリイタルタアリイ　五分

ラウダアニイヲヒヤアト　ヲゝリヨムマアシスギウタ

右散薬　酒ニテ用ユ　其時塩ヲイリテ布ニ包ミ痛所ニヨク　尤痛時ハ臍ニ琥珀油ヲヌル

又小腸ノ痛ハ　腸胃ノ痛ヲ和ケ吐ノ気味ヲトムル　其方

カモメイリ　大茴香一匁　セヰメン小茴香コミイニイ　一匁

白ブドウ酒　四十八匁　デヤスコルデフラカスト　一匁

テリアゝカ　二匁

焼酒ニテヨビダシタル

又方　テリアカ　一匁　ラウダアニイヲヒヤアト

茴香油

ヲゝリヨムアネイシイ　ギウタ　メンタ　霍香

焼酒　十六匁

モシ右ノ薬ニテ不愈　熱盛煩躁噦ハ此時　血分多者ハ尺沢ヨリ血ヲトル也　ソシテ後方ヲ用ユ

野菊花　サンブウシイ　タヅノ木ノ花

右二味ヲ茶ヲセンスル如ク煎スル也　煮汁四十八匁ヲ取テ

テリアアゝカ　二匁　サル

サルホラテリイヲリヨウズミ　ヲクリカンケキリイ　一匁

アンテモウニイデヤホレテコム　一匁

ラウタアニイヲヒヤアト　ラプサンブシイ　十二匁

右ネリ薬ニシテ用ユ　後茴耳ヲ入テ麦粥ヲ冷シテ食スル也

肉損　始胸痛　脇痛　呼吸甚短気　痰血アリ　早々咳アリ　続テ熱アリ

脉

傷酒　急数頻赤又渇モアリ　熱ニ犯サレテ譫語ス　此ハ必死ナリ　此病ノ起リハ冷酒ヲ過シタルナリ・痰モ白ク始ナレハ治スヘシ・大便下ル時ハ悪候ナリ　顔色患甚シ○治術ハ尺沢ヨリ血ヲトル也　左右ニテハ痛方ノ手ノ血ヲトル也○凡左ノ臍ノキハニテ動氣アルハ胸内ヨリ動気アルニアラス　是ハ肌膚ノ間ニアル動脈也　此筋ハ尺沢迄通リタル筋故尺沢ニテ血ヲトル事定法也○血ハ胸痛甚時ニトル　痛軽キハ血ハトラヌ也

右ノ症ハ後ハ腫物トナリテ膿ヲモツ也

仁

二月二十五日

○痢（ディセンテリヤ）　常ノ瀉ニ血カ交リテ下ル　悪寒発熱腹通甚也　大腸チヽマル（一名ブルウトガンク）

渇甚ク大腸小腸ニテ軽重アリ　一通リハ消化セズシテ下ルアル

又尿ヤケテ黄ニナリテ　下ルアリ○後重スルモアリ　腸ノ病ナリ　膿血モアリ　又血計下ルアリ○噦ハ悪症ナリ○動気モアリ○

治術ハ大ニ下スナリ○血ノ下ルハ小腸ノ病ナリ　是レ六シキ症ナリ○大便甚臭気アリ　人ニ移ルモノナリ・動気　噦渇大熱モ悪症

也○大腸ノ病ハ熱モナク膿マシリテ下ル　腸中ニ腫物ガテキタル

也　是ハ治シヤスシ　小腸ノ病ハ熱ツヨク血下六シキ也　吐噦ノ

アルハ必死ナリ　治術ナシ　便黒ク臭気アリ　又舌ニ小瘡ガデキ

タルハ皆悪症也

治術ハ発汗ヨシ　次ニ下スナリ　若船中ナレハ日々潮ニテ船中ヲ洗テ

香ヲタク時々焔硝ヲタク也　大腸ノ病ナレハ肛門ヨリ吹薬ヲスル也

小腸ノ病ハ下シ薬也

其方　大黄　一銭　肉豆冠（ヅ）

右散薬　是ニテサラサラト下ルガヨキ

大黄　ラアテキスヤラアパア

桂枝　焼酒見合セ入ル

〆右

テリアカ　五分　ヲクリカンキリ　キリンケツ

ラウダアニヲヒヤアト　ヲヽリヨムメンタ

右ネリヤクニシテ夜々用ユ

丸薬　痛甚ニハ用之

ラウダアニヲヒヤアト　明礬

右為丸二時三時ノ間ニ用ユ

此間落葉ニ方ナシ

又方

ヲクリカンキリ　珊瑚珠　コロウコスマルテ

ラウダアニヲヒヤアト　ヲヽリヨムマアシス

二月廿二日

○狂犬病（ラウレスヘイステルヘイルコンステケ）　犬ニカキラス諸獣共ニフルレハ其毒ニ中ル

ホ○狂犬ニ成テハ尾ヲ股ニ挟テ舌ヲ出シ唇ニ沫ヲ吐　是狂犬ノ證據也

大ニ病ム時ハ主人ニテモ不覚咬付物也　毒気三年ヨリ内ニ中ラルヽ物

也　病人ハ大熱甚シキ也・九日ノ内ニ療治スヘシ　病人ヘ知サズ河中

水中ヘ突込ハ毒ハ驚拍子ニ抜テシマウ也　海川ニ不限サット水ヲカケ

サエスレハ驚テ毒ヌケル也○治術ハ塩水ニテモ酢ニテリアヽカヲタ

テヽカ洗　心迄温ルヤウニヤキカネヲ中ル也　火気ニテ毒気ヲ援拂也

又ハテリアヽカ計ヲ付テヤキカネヲ中ルモヨシ　又ハ蛇虫ノ油焼酒ヲ

疵ニ付モヨシ

蝮蛇ノ咬ハ咬タ筋ヲクヽル也　疵口ヲペントダニテ吸スモヨシ　疵ノ

口ニダラアネスヲ付也○内治ハ発散ヲ用テ汗ヲサス也　疵口ニハヒキ（蟇）

ヲ付ルヨシ○ヒキハ諸毒ヲ解（ヌク）也　ヒキヲ乾シテ酢ニ浸テ用ヒ又ハ蛇石

モヨシ

内薬　テリアヽカヲ酢ニタテヽ用ユ

又病犬人ノ心カ肝カ或食ス時ハ蛇虫ニサヽレタル時ハ蛇虫ヲ摺テ付也

○梅毒（スパンスボク）　無病ノ人ニテモ毒アル人ニ染ハ移ル　親ヨリモ又移ル　始ハ陰茎ニ瘡デキル　両股ニ筋カ強テコリガテキル也　又脇ノ下ニモテキル

色赤痛甚シ　遊女（ウウル）ニ交レハ必移ル　淋病モ此本也（メイシス）

○内治術　始ニ粉ヲ用テ下シテ毒ヲ洗流ス也（丸ヲ又散ニシテ）

ジネンゴカ　大麦甘草茴香（メルクウリユストリシス）　右煎シテ用テ大便ヲ下ス也　水ヨリモコレマシ也　酒熱物ヲ必用ユベカラズ　始ヨリ軽粉丸用ユヘシ（メルクヽリユスドリシスヲ）

廿七日

○梅毒ハ毒骨く節々ガタルクナル　頭痛スル也　毒骨髄ニ通テ一身中カ腐ルモノナリ　節々カ痛ミ以頭痛甚ク夜ハ猶甚シ　ソレヨリ腫物ニナル也　翻花トナルアリ　或黄色ニ瘡ヲナス　惣身ニ瘡カ発ス　又ヒタイ或前陰ゝ毛中或ハ足ニ計有テ外ニハナキアリ　後ハ髄ニ入テ攻ルモノ也胃中痛口中モ痛　面青目中昧ク不明　声カレテ不出　咳シ耳ナリ　耳後生核　陰茎陰門痛魚口便毒髪落○淋モアリ　必誤テ治術ヲ救スヘカラス口中アゴ舌ナド痛或口中ノ痛ヲ見テ湿トシテ療治スルハ誤治アル也　コレ匂イ分タヌ庸醫アリテ只謝礼ニノミ心付テ誤治スル也　始ハ瘀血ヨリ生スル也　親ヨリ子ヘ移リ乳母ヨリ移ルナリ　口ヲ吸テモ移ル　汗ヨリモ移ル

○治ニ二術アリ

△煎湯　コルト　グハヤアカ　リキネイ　ロウタ　エネイフル（物ノ実）　ラアテキスバルダアナ（根ト云事）

サルサプレラ　土茯苓　ゲレイケリ一

アンテモウニイ　コリデ

○水銀（16）

又方散薬

リキネ　サンクト　レシノス　各等分

南

右三味為散　大ナルビイドロノフラスコニ入テ　メンステレエム（一名）スヒリイテソム」是モ入テロヲシメ主五六日温火ノ側ニオキ用ル時サジニテ二スクイ計用

又　没薬　使十二匁　サルサプレラ　十二匁　甘草八匁

桂四匁　コルデキス　ウキンテラン　六匁

右ノ薬ニ白湯ヲ一シテ弐百八十目入　水銀五十六匁入レ　水銀ハ皮ノ袋ニ入シツカリトロヲヨククヽリ　アンテモウニイコロデヲ布ノ袋ニ入テロヲクヽリテ一所ニ又ロヲヨククヽリテ鍋ノ底ニツカヌ様ニ中ニ釣テ煎スル也　鍋ノロヲヨク塞六時（八）ハカリタク也　又鍋ニ砂ヲ入テ右ノ鍋ノ下ニ置テタク　是ヲフラスコニ入取テヲイテ入用時酒ニテ用ユ

○凡始ハ汗ヲ発スルヨキ也　アトハ水銀下シ也

又方　コレモ又用ユ

バルサムコツパイプ　八匁　レシイナ　レキネ　サンクト　二匁

サツサフラス　五歩　焼酒四十目　サルタルタアル　五歩

ブドウ酒　桶ノ中ニ付キタルヲリ也

○水銀下シノ方

大黄一匁ヨリ一匁五歩迄用ユ
通例和ラカナル下シ也　何レノ病ニモ用ル也

下ノ方

マナ八匁ヨリ四匁　カシヤピルパ十二匁ヨリ二匁　ポリポウデム十二匁
エピテイメム四匁　タマリンデルペルパ八匁
シユビスタントゝ云ハ一味ノ事
インヒユスト云ハ加味ノ事
ラバルタル　一匁五歩ヨリ二匁　白兎霍■　メグワアカン一匁　一匁五歩
黄
蘆會一味ト云事
アロエシビスタンシイ一匁　アロエエキスタラクト　ゲレキン
十六
二分五厘
アロエロザアト　五歩　アロエ　ヒヨラアル五歩
スミレ
セイニヤホヨレ　細末五歩　一匁五歩
セイニヤノ葉

又

薬品

インヘス　二匁　四匁　エキスタラクト　一厘六毛五拂　D　一又ハ同ニ
シカモウネムレシイナ　ケレイン十六　シカモウノムセイドウニヤテム
又ハ
デヤケレデムト云ゲレントヲ　シカモウネム　ロザウト　ゲレントヲ
シカモウネソルホラツト　ゲレントヲ　アガリケスイン
シビスタンシイ　一匁二匁
アガリケスキンヘス　四匁　アガリケストロシスカト　ケレン六D半
トロシスアルハンデルインシビスタント　ケレン六



藤
雌黄　ゲレンD半　八毛二弗也　ラアテキスヤラツパ　末シテ　八毛二弗也
イ〻ン〻ト　五歩D半
ラアテキスヤラツパ　レシイナ　ゲレン　二十六
ヘレボウル　ニギル　ニギル　二匁　四匁　ヘレボウル

下方　下大便悪黒膽ヲ

カシヤピルパ　木皮　和無　未詳　草實也　如蘓子寄生也
マナ　黄大　カグアゝカナ　和無
蘆會
アロエテカ　シヤモウネム　和無

右六味

又方　下悪水

ヤラパア　ピルパタマリンドル　アウリヨムヒユルミナンス
雌黄
ゴムキエタ　シユリス——　イレヲスノスタラト
コルデキスメデスサンブシ
タズノ木ノ内皮

右六味

又方　下　小黒膽

エピテイメム　ナラ樫ノ雲ノ足　ポレポウデム　ホウリヤセイナ
ラアデキスヘレボウリイニゲリイ

右四味

強キ方
又方　メリクウリドリシス　エブリコ
下腸垢
軽粉　アガリイコス　テルペイテム
シ
コロセイニテス
ノキウリ也

右四味

二月廿九日

下薬方　五通アリ　水ト湿トハ違フナリ　湿ハネバ〳〵スル物也　水ニアラズ　下ト云ハ腸胃間ノ穢物ヲ下ス也　其方五アリ

第一　腸胃ノ湿也―ハネバ〳〵スルヲ湿ト云也　其ニ用ルハブリヨウニヤ草　カ（オニトコマ）ヤラツパア　コロシンテイデス　右一味ツゝ用ユ若

第二　ヒイデラゴヲラ　日本ノウジキウリ　此薬第一水腫ノ病ニ用ユ

瓜　野ニアリ　少用スレバ下シ多ク用スレハ吐ス　○キウキウメ　鷺馬キウリカ

スアシノヲシス　キウリ也　根ヲ用ユ水腫ヲ下ス　歯痛ヲ止ム

第三　膽ヲ下ス　○凡病ハ腸胃膽ノ三ヨリ生スル也

大黄　カシイヤ　タマリンデ　橙油枳ノ類也

シヤモウネエム　脂油類　河　無日本

第四　黒青ニシテ通ル　大便ヲ下ス方也　瘀血ノ強シテ膽ノ毒ヲ兼タル也　癩ヲ下ス方也

蘆會　蔵ノ屎　寫剤也　小児　エレボウリス　ニリゲリイ

軽粉　ポレポウデム　ナラ樫ノ雲ノ足

第五　腸胃間ニ鬱滞シテラルヲ下ス方也

エキスタラクトム　パンゲマゴムコロリイ

霊芝　サルノコシカケ　腸中ヲ洗流スルモノナリ

○アガリスクス　唐日本ノ此ヲ一ノカトリニ用　コロシンテイデス

エブリコカ

松前ヨリ来　味苦色白木ニ寄生スルモノ也

猿ノコシカケノ類　葛根ニ似タルハ　即エブリ也

アルボリアルビイ　是ハ吐ニモ用　又下シニモ用

日本唐ノモクサヲ用ル如ク紅毛ニハ此ヲ用ユ

火ノヨクツクモノナリ

アガリイクス

△エブリコ　無毒上品軽其色白　味苦可貯干乾所

瀉下剤　通

主治　下腸垢　殺虫　順経水　合生姜治筋緒

穢物

（裏表紙）

○烏賊骨　治帯下膿淋

○赤目洗薬　石密　一匁　白礬　一厘

## まとめと考察

巻一の概要をキーワードで示すと以下になる。

一　自序

二　熱病（コオルツ）

三　瘡

四　腫脹（ヘイドロピイクス）

五　石淋

六　疝気（コレイキ）

七　痢（ディヤセンテリア）

八　狂犬病

九　梅毒（スパンスポク）

夫々の病態、原因、可能な治療法等を記載している。

## 参考文献および注釈

(1) 富士川游『温恭合田求吾先生』中外医事新報　一二三九号　一～九ページ　一九三六年（昭和十一）。
右の文献から略歴をまとめた。讃岐国豊田郡和田浜生まれ（現香川県観音寺市）。父は合田伝右衛門吉盤。弟は合田大介（蘭齋）。名は強、字は千之、通称求吾、温恭、号は巨鼇、鼇山。幼少の時、合田又玄、高橋柳哲について医を修め、宝暦二年（一七五二）二月京にて松原一閑斎に医と儒を学んだ。宝暦六年（一七五六）江戸にて望月三英につき、山脇東洋による『外台秘要方』の開板の校正に携わった。その後、長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ後、宝暦十二年（一七六二）一月長崎より讃岐へ帰る途中の南肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い、二人に長崎に遊学を勧める。墓は香川県観音寺市豊浜町和田浜。
(2) 片桐一男『江戸の蘭方医学事始　阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門　耕牛』丸善ライブラリー　二〇〇〇年（平成十二）　二三一～二四〇頁
右文献から吉雄耕牛の略歴をまとめた。
享保九年（一七二四）生　長崎　寛政十二年（一八〇〇）死　長崎
江戸時代中期の蘭方医。吉雄流外科の開祖。初め定次郎、次いで幸左衛門、のちに幸作、幸載と称す。諱は永章、号が耕牛、養浩斎、成秀館ともいう。長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ、少年時代からオランダ商館に出入りして、寛保二年（一七四二）、一九歳で小通詞、寛延一年（一七四八）には大通詞となった。
(3) 長与健夫『合田求吾の『紅毛医言』について』日本医史学雑誌　三十八巻三号　八九～一〇〇頁　一九九二年（平成四）
(4) 板野俊文、田中健二　合田強の『紅毛醫言』の現代語訳　医譚　通巻一一九号　一〇二～一二三頁　二〇一五年（平成二七）
永富独嘯庵の叙の汗吐下に関する部分の口語訳。
「合田氏は通詞の吉雄氏について二か国語を理解して、一巻をしあげた。私はこれをひもといてみると、汗、吐、下という体をきれいにすることが書かれている。全てが私が学んできた道と同じようなものであることがわかった」。
(5) 板野俊文、田中健二　合田強の『西洋医述　巻三』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　第六十二巻　一号　九二～七五頁　二〇一六年（平成二八）
(6) 板野俊文、田中健二　合田強の『西洋医述　巻四』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　第六十三巻　一号　一四六～一三三頁　二〇一七年（平成二九）
(7) 板野俊文、田中健二　合田強の『西洋医述　五』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　第六十三巻　三号　三六〇～三五二頁　二〇一七年（平成二九）
(8) 建部清庵　杉田玄白『和蘭医事問答　巻之上』寛政七年（一七九五）一丁表　実際に建部清庵が弟子の衣関甫軒に質問の手紙を持たせて江戸に派遣した日付は明和七年（一七七〇）である。
(9) 合田家の所蔵本には「可秘」と書かれているものがあり、一子相伝で他には見せてはならないという言い伝えがある。本によっては現在でも閲覧が不能なものがある。これらの講義録は可秘ではないが、吉雄耕牛自身が出版しなかったという事実とも関連があるかもしれない。また三巻等に載せられている病理解剖図は、当時としては、当然、秘とすべきものであったと考えられる。
(10) 永富独嘯庵の『漫遊雑記』中の汗吐下に関する部分の読み下し文
紅毛の俗　汗吐下をよくす　寶歴壬午春　余西遊して長崎に至る　訳師吉雄氏に就いて　かの邦の語に通ずるを得る　その治術剛腹　ついに邦人に用い難しといえども汗吐下の機用に至り　一々わが古医方と符する　それ中華聖人の邦その道を失い二千年　特に蛮貊において　これを得る者また異ならずや　かつその国の政は人屍を刳るを禁ぜず　その民また屠腸絶節の惨を屑せず　これをもって人病死し病源明かならざれば　則ちこれを刳剥す　視て以て後　図をなす　此の如く数千年その書鬱然として存す　有志の士は考証玩索　志業を奨助すべき者有るなり
(11) ロート根　アトロピンについて聞いたことをメモしたと思われる。これらの情報はのちに、華岡青洲の痲沸散や土生阮籍の散瞳剤につながっていく。
(12) 土茯苓　当時、梅毒の薬として、使われたのでそれを写したと思われる。
(13) 紅毛醫述序の意訳
善も積らざれば　則ち名を成すに足らず　一善の微積みて息まざれば　則ちついに徳を成すに至る　徳の流衍する畫郵して傳うるよりも速し　而して後の世に用いられる　則ちその徳の及ぼす所廣遠にして限り有るべからざるなり　崎

陽高及吉雄先生　家世紅毛訳師たり　旁ら外科の術を好む　直常に蛮豎についてその術を学ぶ　これを習うや精　これを試るや数年　広く諸衆に施す　その徳　東方に流行すること日に一日多し　今茲壬午の春　余　崎陽に参り吉雄先生に寓舎す　問うに紅毛内科の術を以てすれば　先生及びその賢弟蘆風君　訳して以てこれを教ゆ　その書けだし数万言　百病證治より草木蔵府の説に至るまったく備わらざることなし　しかしてその術旨悉く汗吐下に帰す　かつて聞く紅毛の医たるや　惟外科のみ有て内科有ることなしと　ひそかにこれを疑うこと数年　今一旦にして氷釈す　ここにおいて随いて聞き随いて筆す　ついに積もりて巻をなす　ああ図らざりき　術をすること　ここに至らんとは　しかる後に　先生の徳　東方に流行すること　またまさに益々遠大とならんと　愉快ならざらんやあに愉快ならざらんや　あに量に限り有らざらんや　ここにおいて楽しみに言をなさんや

寶歴十二年閏四月　讃州　合田強書於崎陽寓舎中

(14) 文献8の『和蘭医事問答』において、杉田玄白が汗吐下方について、次の説明を行っている。

大体治療仕方、唐にて申汗吐下三法と相聞へ申候　是を「デリーヲーペンデミッテレン」と申候　三等開塞法と申事に御座候

(15) 日付によればこの文は講義の終了後に作られたことがわかる。

(16) 文献2によれば、梅毒に水銀療法が行われたのは、よく知られているが、その最初は流涎療法であった。しかし、これは副作用が大きいことから、普及はしなかった。その後、塩化第一水銀（軽粉）を用いる方法がここに記載されている方法である。第一水銀は水に不溶なので、利用が困難であった。この後、ツュンベリーによって塩化第二水銀の水溶液（スウィーテン水）を用いる方法が導入された。これは副作用のことを考えなければ、非常に使いやすいことから、江戸にも伝わり杉田玄白なども利用した。吉雄耕牛によって伝えられたことは重要な業績の一である。